

特116

514

和文老子 全



始



43/116
514

序

老子の言ふ所は自然を尙びて作爲を排するに在り。事の已むを得ざる所に従ひて無理を爲さざるに在り。人能く自然を尙びて私智を弄すること無く事の已むを得ざる所に従ひて無理を爲すこと無からんか。仁義無くして仁義ならざる莫く禮知無くして禮知ならざる莫けん。孔子の所謂心の欲する所に従ふも矩を踰へざるものなり。融通無碍行くとして可ならざる莫きなり。老子五千言。唯斯くの如きのみ。

余常に大いに老子を好む。僧侶の讀經に於けるが如く閑に乗じて音讀するを樂みと爲す。然れども世上行はるゝ所の著書或は註釋を主として之に紙數を費し或は其の活字過小にして通讀に便を缺き或は原文に忠なるの餘り余の如き淺學の徒に適せず。乃ち自ら好む所の体容に編纂譯述して以て己れの修養に資すると共に世の道を求むる者の參考に供せり。若し夫れ聊かにても虚無の徒を便益し一人の老子の徒を得ば余の幸甚とする所なり。

大正十五年二月二十日

編者識す

15. 3. 13

内交

目次

第一	常の道	一
第二	無爲の事	一
第三	無知無欲	二
第四	和光同塵	二
第五	中を守る	三
第六	天地の根	三
第七	その身を後にす	三
第八	不争の徳	四
第九	盈滿を厭ふ	四
第十	玄徳	四
第十一	無の用	五
第十二	五色五音	五
第十三	身を忘る	六

第十四	夷希微の道	六
第十五	古への善人	七
第十六	虚極を致す	八
第十七	我を自然と曰ふ	八
第十八	大道と仁義	九
第十九	聖を絶つ	九
第二十	學を絶つ	九
第二十一	孔徳の容	一〇
第二十二	曲れば全し	一一
第二十三	希言は自然	一一
第二十四	餘食贅行	一二
第二十五	自然の道	一二
第二十六	重は輕の根	一三

第二十七	轍迹無し……………	三
第二十八	樸を用ふ……………	四
第二十九	甚しきを去る……………	五
第三十	果ならんのみ……………	五
第三十一	不祥の器……………	六
第三十二	止まるを知る……………	七
第三十三	死して亡びず……………	七
第三十四	自ら大とせず……………	八
第三十五	安平泰……………	八
第三十六	柔弱の力……………	八
第三十七	無爲と有爲……………	九
第三十八	徳と仁と義と禮……………	九
第三十九	賤は貴の本……………	九
第四十	道に反る……………	二
第四十一	明道は昧きが若し……………	三

第四十二	強梁なる者……………	三
第四十三	無爲の益……………	三
第四十四	足るを知る……………	三
第四十五	天下の正……………	三
第四十六	常に足る……………	四
第四十七	行かずして知る……………	四
第四十八	無事を以てす……………	五
第四十九	常の心無し……………	五
第五十	死地無し……………	六
第五十一	道の善徳の貴……………	六
第五十二	襲常……………	七
第五十三	盜誇……………	七
第五十四	善く建つる者……………	六
第五十五	赤子に比す……………	六
第五十六	知る者は言はず……………	九

第五十七	無爲にして化す……………	九
第五十八	方にして割らず……………	〇
第五十九	嗇に如かず……………	〇
第六十	小鮮を烹るが若し……………	二
第六十一	天下の牝……………	三
第六十二	善人の寶……………	三
第六十三	大小多少……………	三
第六十四	九層の臺……………	三
第六十五	民を愚にす……………	四
第六十六	百谷の王……………	五
第六十七	三寶……………	五
第六十八	善く戦ふ者……………	六
第六十九	哀しむ者勝つ……………	六
第七十	褐を被る……………	七
第七十一	知りて知らず……………	七

第七十二	大威至る……………	六
第七十三	天網恢々……………	六
第七十四	司殺の者……………	九
第七十五	民の飢……………	九
第七十六	強大と柔弱……………	九
第七十七	弓を張るが如し……………	〇
第七十八	正言は反するが若し……………	〇
第七十九	人に責めず……………	一
第八十	結繩に復らしむ……………	一
第八十一	聖人積まず……………	二

(目次終り)

和文老子

佐々木 寛編

第一 常の道

道の道とす可きは常の道に非ず。名の名とす可きは常の名に非ず。無名は天地の始め有名は萬物の母。故に常に無以て其の妙を觀んと欲し常に有以て其の微を觀んと欲す。此の兩者同出にして異名なり。同じく之を玄と謂ふ。玄の又た玄衆妙の門

第二 無爲の事

天下皆美の美爲るを知る。斯れ惡己。皆善の善爲るを知る。斯れ不善己。故に有無相生じ難易相成し長短相形し高下相傾き音聲相和し前後相隨ふ。是を以て聖人無爲の事に處り不言の教へを行ふ萬物作りて辭せず生じて有せず爲して恃まず功成りて居らず。夫

微 物の盡くる
所 衆妙の門 一切
妙理の門

無爲の事に處り
事即ち自然
ざる所即ち自然
に從つて無理を
しない

れ唯だ居らず。是を以て去らず。

第三 無知無欲

賢を尙ばざれば民をして争はざらしむ。得難きの貨を貴ばざれば民をして盗を爲さざらしむ。欲すべきを見ざれば心をして亂れざらしむ。是を以て聖人の治は其の心を虚しくして其の腹を實す。其の志を弱くして其の骨を強くす。常に民をして無知無欲ならしめ夫の知者をして敢へて爲さざらしむ。無爲を爲せば則ち治まらざる無し。

第四 和光同塵

道は冲なり。而して之を用ふること或ひは盈たず。淵乎として萬物の宗に似たり。其の鋭を挫き其の紛を解き其の光を和げ其の塵に同ず。湛乎として存するが如きに似たり。吾れ誰の子なること

腹を實す民を
して衣食に不足
なからしむ
知者物知り三
百

冲虚

鋭を挫き聰明
叡智之を守るに
愚を以てすの意

帝の先虚無の
道象つた人
である

仁ならず心有
つて仁をなすに
非ず
芻狗藁籥で作つ
た犬
藁籥ふいご
屈せず盡きす
多言有我が言

谷神道の異名
勤めず自然に
従ふのだから勤
勞といふことが
無い

を知らず。帝の先に象る。

第五 中を守る

天地仁ならず。萬物を以て芻狗と爲す。聖人仁ならず百姓を以て芻狗となす。天地の間は其れ猶ほ藁籥のごとき乎。虚にして屈せず動いて愈よ出づ。多言は數ず窮す。中を守るに如かす。

第六 天地の根

谷神死せず是れを玄牝と謂ふ。玄牝の門是れを天地の根といふ。綿々として存するが若し。之を用ひて勤めず。

第七 その身を後にす

天は長く地は久し。天地の能く長く且つ久しき所以は其の自ら生ぜざるを以ての故に能く長生す。是を以て聖人は其の身を後にして身先んじ其の身を外にして身存す。其の私無きを以てに非ずや

故に能く其の私を成す。

第八 不爭の徳

上善は水の若し。水善く萬物を利して争はず衆人の惡む所に處る故に道に幾し。居は善地心は善淵與は善仁言は善信政は善治事は善能動は善時夫れ唯だ争はず。故に尤め無し。

第九 盈滿を厭ふ

持ちて之を盈すは其の己むに如かず。揣めて之を鋭くすれば長く保つ可からず。金玉堂に滿つれば之を能く守ること無し。富貴にして驕れば自ら其の咎めを遺す。功成り名遂げて身退くは天の道なり。

第十 玄徳

營魄を載せ一を抱いて能く離るゝこと無からんか。氣を専らにし

惡む所 低き地位

營魄 五官 一 虚無の道

滌除玄覽 雜念を滌ぎ除いて虚無の道を諦観する
天門 心を開闔 自然に従ふこと

牖 窓

柔を致して能く嬰兒の如くならんか。滌除玄覽して能く疵無からんか。民を愛し國を治めて能く爲すこと無からんか。天門開闔して能く雌を爲さんか。明白四に達して能く知ること無からんか。之を生じ之を畜ふ。生じて有せず爲して恃まず長じて宰らず。是れを玄徳と謂ふ。

第十一 無の用

三十輻一轂を共にす。其の無に當つて車の用有り。埴を挺して以て器を爲る。其の無に當つて器の用あり。戸牖を鑿つて以て室を爲る。其の無に當つて室の用有り。故に有の以て利爲るは無の以て用爲るなり。

第十二 五色五音

五色は人をして目盲せしむ。五音は人をして耳聾せしむ。五味は

馳騁田獵馬を
乗り廻して獵を
すること
腹内心
目外物

辱を下と爲す
寵を上と爲すの
句が省かれてゐ
る

人をして口爽はしむ。馳騁田獵は人をして心狂を發せしむ。得難
きの寶は人をして行ひ妨げしむ。是を以て聖人は腹を爲して目を
爲さず。故に彼を去つて此れを取る。

第十三 身を恐る

寵辱は驚くが若くす。大患を貴ぶこと身の若くす。何をか寵辱と
謂ふ。辱を下と爲す。之を得るも驚くが若くし之を失ふも驚くが
若くす。何をか大患を貴ぶこと身の若くすと謂ふ。吾の大患有る
所以は吾の身有るが爲めなり。吾の身無きに及んで吾何の患ひか
有らん。故に身を以て天下を爲むることを貴しまば則ち天下を寄
す可し。身を以て天下を爲むることを愛しまば乃ち以て天下を託
すべし。

第十四 夷希微の道

之を視れども見えず。名けて夷と曰ふ。之を聽けども聞えず。名
けて希と曰ふ。之を搏ふれども得ず。名けて微と曰ふ。此の三の
者は致し詰る可からず。故に混じて一と爲す。其れ上りても儼か
ならず。其れ下りても昧からず。繩々として名く可からず。復た
無物に歸す。是れを無狀の狀無象の象と謂ふ。是れを恍惚と謂ふ
之を迎へて其の首めを見ず。之に隨ひて其の後ろを見ず。古の道
を執りて以て今の有を御すれば能く古始を知る。是れを道紀と謂
ふ。

第十五 古への善人

古への善く士たる者は微妙玄通深くして識る可らず。夫れ唯だ識
る可からず。故に強ひて之が容を爲す。豫として冬川を渉るが若
し。猶として四隣を畏るゝが如し。儼として客の若し。渙として
氷の將に釋けんとするが若し。敦として其れ樸の若し。曠として

豫豫も猶も共
に獸の名で遲疑
して勢に乗する
ことなし
樸山から伐り
出したばかりの
木飾りはないが
内に萬全を含ん

道紀 道の綱

致し詰る 問ひ
詰める
繩々 道の長く
續くさま

でゐる
濁る 世俗と交

生せん 動いて
事をする

芸々 物の多い
さま

其れ谷の如し。渾として其れ濁るが如し。孰れか能く濁りて以てこれを靜かにして徐ろに清からん。孰れか能く安んじて以て之を久うして徐ろに生ぜん。此の道を保つ者は盈つることを欲せず。夫れ唯だ盈たず。是を以て能く蔽れて新たに成さず。

第十六 虚極を致す

虚極を致し靜篤を守る。萬物並びに作りて吾以て其復るを觀る。夫れ物芸々として各其の根に歸る。根に歸るを靜と曰ふ。靜を復命と曰ふ。復命を常と曰ふ。常を知るを明と曰ふ。常を知らざれば妄りに凶を作す。常を知れば容る。容るれば乃ち公なり。公なれば乃ち王なり。王なれば乃ち天なり。天なれば乃ち道なり。道なれば乃ち久し。身を没る迄殆からず。

第十七 我れを自然と曰ふ

太上 太古の世

太上は下之れ有ることを知る。其の次は之を親しみ之を譽む。其の次は之を侮る。故に信足らざれば信ぜられざること有り。猶として其れ言を貴ぶ。功成り事遂げて百姓皆我を自然と曰ふ。

第十八 大道と仁義

大道廢れて仁義有り。智慧出で、大偽有り。六親和せずして孝慈有り。國家昏亂して忠臣有り。

第十九 聖を絶つ

聖を絶ち智を棄つれば民の利百倍す。仁を絶ち義を棄つれば民孝慈に復る。功を絶ち利を棄つれば盜賊有ること無し。此の三の者以爲らく文にして足らずと。故に屬する所有らしむ。素を見樸を抱き私少く欲寡し。

第二十 學を絶つ

文 人為の外飾
足らず 民を治
むるに足らず
屬する所 治心
の標的

唯言下に應ず
 阿時を経て應
 人の聲その前に
 「されど」と入れ
 て見よ
 大牢牛羊豚の
 養應
 乗々蠶めくさ
 ま

察々微細な點
 にも氣がつくこ
 悶々智慧が働
 母道

孔徳盛徳ある
 人の状貌

學を絶てば憂無し。唯阿と相去ること幾何ぞ。善と惡と相去ること何若。人の畏るゝ所は畏れざる可らず。荒として其れ未だ央まらざる哉。衆人懇々として大牢を享くるが如く春台に登るが如し。我獨り泊として其れ未だ兆はれず。嬰兒の未だ孩せざるが若く乗々として歸する所無きが若し。衆人は皆餘有りとして我獨り遺るゝが若し。我は愚人の心ある哉沌々たり。俗人は昭々として我獨り昏きが若し。俗人は察々として我獨り悶々たり。澹として夫れ海の若く鸞として止まる所無きに似たり。衆人は皆以ゆること有りて我獨り頑且つ鄙なり。我獨り人に異なりて食を母に求むることを貴ぶ。

第二十一 孔徳の容

孔徳の容は唯だ道に是れ従ふ。道の物爲る唯だ恍たり。唯だ惚たり。

衆甫衆善

曲れば全し柳
 に雪折なしの意

式手本

歸す天より受
 けたる身なれば
 全うして天に歸
 すの意

り。惚たり恍たり。其の中に象有り。恍たり惚たり。其の中に物有り。窈たり冥たり。其の中に精有り。其の精甚だ眞なり。其の中に信有り。古より今に及ぶまで其の名去らず。以て衆甫を閱ぶ吾何を以て衆甫の然ることを知る哉。此を以てなり。

第二十二 曲れば全し

曲れば則ち全し。枉れば則ち直し。窪めば則ち盈つ。弊るれば則ち新なり。少ければ則ち得。多ければ則ち惑ふ。是を以て聖人一を抱いて天下の式と爲る。自ら見ず。故に明なり。自らは是とせず。故に彰はる。自ら伐らず。故に功有り。自ら衿らず。故に長し。夫れ唯だ争はず。故に天下能く之と争ふこと無し。古の所謂曲れば則ち全しとは豈虚言ならんや。誠に全うして之を歸す。

第二十三 希言は自然

希言しげん言葉の少
く短いこと
日を終へず一
日中降つてゐな
い

徳とく富貴
失し貧賤
樂たのしみむ安んず
る

餘食贅行じよしきぜいぎやう餘計
なこと
物もの論ろん即ち人
處ところらず餘食贅
行ぎやうをしない

希言は自然なり。故に飄風は朝を終へず。驟雨は日を終へず。孰れか此れを爲す者ぞ。天地なり。天地すら尙ほ久しきこと能はず而るを況んや人に於てをや。故に事に道に従ふ者は道は道に同じ徳は徳に同じ失は失に同ず。道に同ずる者は道も亦之を得ること樂しむ徳に同ずる者は徳も亦之を得ることを樂しむ。信足らざれば信ぜざること有り。

第二十四 餘食贅行

跂つまたつ者は立たず。跨またがる者は行かず。自ら見る者は明ならず。自らは是とする者は彰はれず。自ら伐る者は功無し。自ら矜る者は長からず。其の道に在つてや餘食贅行と曰ふ。物或は之を惡む。故に道有る者は處らず。

第二十五 自然の道

改めず不よ變不
易い周行しゆぎやう周く天下
に行き渡る

法はる依よる

燕處えんじよ安居

物有り混成す。天地に先ちて生ず。寂たり寥たり。獨立して改めず。周行して殆ちやうからず。以て天下の母と爲る可し。吾其の名を知らず。之を字けて道と曰ひ強ひて之が名を爲りて大と曰ふ。大を逝しと曰ひ逝を遠と曰ひ遠を反と曰ふ。故に道は大なり。天も大なり。地も大なり。王も亦大なり。域いき中に四大有りて王一に處る。人は地に法り地は天に法り天は道に法り道は自然に法る。

第二十六 重は輕の根

重は輕の根爲り。靜は躁の君爲り。是を以て君子は終日行けども輜重を離れず。榮觀有りさ雖も燕處して超然たり。如何ぞ萬乗の主にして身を以て天下よりも輕しとする。輕ければ則ち臣を失ひ躁さうしければ則ち君を失ふ。

第二十七 轍迹なし

轍迹無し例へば雲の行き水の行くが如し玉の疵譴は人の咎め

要妙肝要の妙道

白潔白
黒愚闇

善く行くものは轍迹無し。善く言ふものは瑕譴無し。善く計るものは籌策を用ひず。善く閉づるものは關鍵無ければも而も開く可らず。善く結ぶものは繩約無ければも而も解く可らず。是を以て聖人は常に善く人を救ふ。故に棄人無し。常に善く物を救ふ。故に棄物無し。是を襲明と謂ふ。故に善人は不善人の師。不善人は善人の資なり。其の師を貴ばず其の資を愛せざれば知なりと雖も大いに迷ふ。是を要妙と謂ふ。

第二十八 樸を用ふ

其の雄を知りて其の雌を守れば天下の谿と爲る。天下の谿と爲れば常の徳離れず嬰兒に復歸す。其の白を知りて其の黒を守れば天下の式と爲る。天下の式と爲れば常の徳忒はず無の極に復る。其の榮を知りて其の辱を守れば天下の谷と爲る。天下の谷と爲れば

大制大なる製
作割たす自然の
ま

神器天下

載成

泰心の驕り

人主天子諸
侯

師大軍
善なる者最も
善き手段
果克己果斷

常の徳乃ち足りて樸に復歸す。樸散すれば則ち器となる。聖人之を用ふれば則ち官の長と爲る。故に大制は割たす。

第二十九 甚しきを去る

將に天下を取りて之を爲めんと欲する者は吾其の得ざるを見るのみ。天下の神器は爲むべからず。爲むる者は之を敗り執る者は之を失ふ。凡そ物或は行き或は隨ふ。或は嘘し或は吹く。或は強く或は羸し。或は載り或は墮る。是を以て聖人は甚を去り奢を去り泰を去る。

第三十 果ならんのみ

道を以て人主を佐くる者は兵を以て天下に強からず。其れ事は還るを好む。師の處る所は荆棘生ず。大軍の後には必ず凶年有り。故に善なる者は果ならんのみ。敢て以て強を取らず。果にして矜

ること勿れ。果にして伐ること勿れ。果にして驕ること勿れ。果にして已むことを得ざれ。果にして強きこと勿れ。物壯んなれば則ち考ふ。是を非道と謂ふ。非道は早く已めよ。

第三十一 不祥の器

夫れ兵を佳する者は不祥の器なり。物或は之を悪む。故に道有る者は處らず。是を以て君子は居れば則ち左を貴ぶ。兵を用ふれば則ち右を貴ぶ。兵は不祥の器なり。君子の器に非ず。已むを得ずして之を用ひば恬淡を上と爲す。勝ちて美せず。而るに之を美する者は是れ人を殺すことを樂むなり。人を殺すことを樂しむ者は志を天下に得べからず。故に吉事には左を尙び凶事には右を尙ぶ是を以て偏將軍左に處り上將軍右に處る。上に居る勢ひを言へば則ち喪の禮を以て之に處る。人を殺すこと衆多なれば以て悲哀し

美せず 誇りこ
しない

偏將軍 副將軍

て之に泣く。戦ひ勝ちて喪の禮を以て之に處る。

第三十二 止まるを知る

道の常は名無し。樸は小なりと雖も天下敢て臣とせず。侯王若し能く守らば萬物將に自ら賓せんす。天地相合して以て甘露を降す。人之を令せしむること莫くして自ら均し。始めて制して名有り。名も亦既に有り。夫れ亦將に止まることを知らんとす。止まることを知るは殆からざる所以なり。譬へば道の天下に在るは由ほ川谷の江海に於るが如し。

第三十三 死して亡びず

人を知る者は智なり。自ら知る者は明なり。人に勝つ者は力有り自ら勝つ者は強し。足ることを知る者は富めり。強め行ふ者は志有り。其の所を失はざる者は久し。死して亡びざる者は壽し。

樸 道
賓 歸服

左右す可し〓左
右前後遍在す

第三十四 自ら大とせず

大道は汎はんとして其れ左右す可し。萬物之を恃んで以て生じて辞せず。功成りて居らず。萬物を衣養して主と爲らず。故に常に無欲なるは小に名く可し。萬物焉ごれに歸して主を知らざるは大に名く可し。是を以て聖人は能く其の大を成す。其の自ら大なりとせざるを以ての故に能く其の大を成す。

第三十五 安 平 泰

大象たいしやうを執りて天下に往く。往きて害せられず安平泰なり。樂がくと餌にとは過客も止まる。道の言に出づることは淡乎として其れ味あじひ無し。之を視れども見るに足らず。之を聽きげども聞くに足らず。之を用ふれども既すです可らず。

第三十六 柔弱の力

大象たいしやう〓虚無の道
〓音樂
餌に〓飲食
過客かかく〓旅人

國の利器りき〓兵器
人に示すし〓戰ふ
こと

第三十七 無爲と有爲

將に之を喩あやめんと欲せば必ず固こに之を張れ。將に之を弱めんと欲せば必ず固こに之を強くせよ。將に之を廢せんと欲せば必ず固こに之を興せ。將に之を奪はんと欲せば必ず固こに之を與ふ。之を微明と謂ふ。柔は剛に勝ち弱は強に勝つ。魚は淵のぶを脱のがる可らず。國の利器は以て人に示す可らず。

道は常に爲すこと無くして而も爲さること無し。侯王若し能く守らば萬物將に自ら化せんとす。化して作なさんと欲せば吾將に鎮するに無名の樸を以てせんとす。無名の樸も亦將た不欲なり。不欲にして以て靜かならば天下將に自ら正ただしからんとす。

第三十八 徳と仁と義と禮

上徳は徳あらず。是を以て徳有り。下徳は徳を失はず。是を以て

作なさんと欲す〓
私智私欲を用ひ
ること

前識 博學
厚き 上徳
薄き 禮
實 虚無の道
華 博學

貞 正しき手本

徳無し。上徳は爲すこと無くして以て爲すこと無し。下徳は之を爲して以て爲すこと有り。上仁は之を爲して以て爲すこと無し。上義は之を爲して以て爲すこと有り。上禮は之を爲して之に應ずること莫ければ則ち臂を攘げて之を扔く。故に道を失つて後徳あり。徳を失つて後仁あり。仁を失つて後義あり。義を失つて後禮あり。夫れ禮は忠信の薄きにして亂の首めなり。前識は道の華にして愚の始めなり。是を以て大丈夫は其の厚きに處りて薄きを取らず。其の實に居りて其の華に居らず。故に彼を去りて此を取る

第三十九 賤は貴の本

昔の一を得る者は天は一を得て以て清し。地は一を得て以て寧し。神は一を得て以て靈なり。谷は一を得て以て盈つ。萬物は一を得て以て生る。王侯は一を得て以て天下の貞を爲る。其の之を致す

孤寡不穀 人君の謙辭
致めて 各部分に就て

反 歸根復命
動 作用

こと一なり。天以て清きこと無ければ將た裂けんことを恐る。地以て寧きこと無ければ將た發かんことを恐る。神以て靈なること無ければ將た歇まんことを恐る。谷以て盈つること無ければ將た竭きんことを恐る。萬物以て生ること無ければ將た滅びんことを恐る。侯王以て貞なること無くして貴高ならば將た蹶かんことを恐る。故に貴きは賤を以て本と爲し高きは下を以て基と爲す。是を以て侯王は自ら孤寡不穀と稱す。此れ其れ賤を以て本と爲す耶非乎。故に致めて車を數ふれば車無し。珠々として玉の如く落々として石の如くなるを欲せず。

第四十 道に反る

反は道の動なり。弱は道の用なり。天下の物は有に生り有は無に生る。

第四十一 明道は賤きが如し

上士は道を聞きて勤めて之を行ふ。中士は道を聞きて存するが若く亡ふが若し。下士は道を聞きて大いに之を笑ふ。笑はざれば以て道と爲すに足らず。故に建言に之れ有り。明道は味きが若し。夷道は類じきが若し。進道は退くが若し。上徳は谷の若し。大白は辱の若し。廣徳は足らざるが如し。健徳は偷むが若し。質眞は渝るが若し。大方は隅無し。大器は晩成す。大音は聲希なり。大象は形無し。道は隠れて名無し。夫れ惟だ道は善く貸して且つ成せり。

第四十二 強梁なる者

道一を生じ一二を生じ二三を生じ三萬物を生ず。萬物陰を負うて陽を抱き冲氣以て和することを爲す。人の惡む所は唯だ孤寡不穀

建言 古人の語

夷道 大道

偷むが若し 宜傳もせず 報酬も

來めず 大音 價值ある 言葉

道一を生じ 始

めに道あり

二 陰陽

三 天地人

負陰抱陽 陽陰

相兼ね 不穀 不善

強梁 強張る

なり。而るに王侯以て稱と爲す。故に物或は之を損して益し之を益して損す。人の教ふる所も亦た我れ義もて之を教ふ。強梁なる者は其の死を得ず。吾將に以て教への父と爲さんとす。

第四十三 無爲の益

天下の至柔は天下の至堅に馳騁す。有ること無きは間無きに入る是を以て無爲の益有ることを知る。不言の教へ無爲の益天下之に及ぶこと希れなり。

第四十四 足るを知る

名と身と孰れか親しき。身と貨と孰れか多き。得ること亡ふと孰ぞ病まん。是の故に甚だ愛すれば必ず大いに費す。多く藏むれば必ず厚く亡ふ。足ることを知れば辱められず。止まることを知れば殆からず。以て長久なる可し。

多き 重き

病まん 憂へん

第四十五 天下の正

正 手本

走馬 軍馬
糞 田作る
戎馬 郊に生る
馬 郊外の耕馬が軍馬となる
欲す 可き物
欲する なり

大成は缺くるが若し。其の用敵へず。大盈は冲しきが若し。其の用窮らず。大道は屈めるが若し。大功は拙きが若し。大辯は訥なるが若し。躁は寒に勝ち静は熱に勝つ。清静にして天下の正爲り

第四十六 常に足る

天下道有れば走馬を却けて以て糞る。天下道無ければ戎馬郊に生る。罪は欲す可きより大なるは莫し。禍は足ることを知らざるより大なるは莫し。咎は得ることを欲するより大なるは莫し。故に足ることを知るの足るは常に足る。

第四十七 行かずして知る

戸を出でずして天下を知り牖を窺はずして天道を見る。其の出づること愈々遠くして其の知ること彌よ少し。是を以て聖人は行か

ずして知り見さずして名あり爲さずして成る。

第四十八 無事を以てす

學を爲せば日に益す。道を爲せば日に損す。之を損し又損して以て爲すこと無きに至る。爲すこと無くして爲さること無し。故に天ドを取る者は常に事無きを以てす。其の事有るに及んでは以て天下を取るに足らず。

第四十九 常の心無し

聖人は常の心無し。百姓の心を以て心と爲す。善なる者も吾之を善とし不善なる者も吾亦之を善とすれば善を得。信ある者も吾之を信じ信あらざる者も吾亦之を信すれば信を得。聖人の天下に在るは牒々として天下の爲めに心を渾にす。百姓皆其の耳目を注ぐ聖人皆之を孩にす。

常の心 有我の心

益す 知る こと
が 増す に 過ぎ ない
損す 物事 が 簡
單に 減する

牒々 不安のさま
孩 赤子の如く
一視同仁

第五十 死地なし

出づれば悟れ
 入れば迷へば
 厚き欲心の厚
 きなり
 兕野牛

出づれば生き入れば死す。生の徒十に三有り。死の徒十に三有り。民の生動もすれば死地に之く。亦十に三有り。夫れ何の故ぞ。其の生ずるの厚きを以てなり。蓋し聞く。善く生を攝むる者は陸に行きて兕虎に遇はず。軍に入りて甲兵を被らず。兕も其の角を投ずる所無し。虎も其の爪を措く所無し。兵も其の刃を容る、所無し。夫れ何の故ぞ。死地無きを以てなり。

第五十一 道の善徳の貴

道之を生じ徳之を畜ひ物之を形し勢ひ之を成す。是を以て萬物道を尊んで徳を貴ばずといふこと無し。道の尊き徳の貴きは夫れ之を命ずること莫くして常に自ら然り。故に道之を生じ之を蓄へ之を長じ之を育て之を成し之を熟し之を養ひ之を覆ふ。生じて有せ

ず爲して恃まず長じて宰らず。是を立徳と謂ふ。

第五十二 襲常

其の子萬物
 兌口
 塞ぎ口腹の欲
 に囚はれざるな
 り
 勤らす勞苦せ
 小道

天下始め有りて以て天下の母と爲る。既に其の母を得て以て其の子を知る。既に其の子を知りて復た其の母を守れば身を没るまで殆からず。其の兌を塞ぎ其の門を閉づれば身を終るまで勤らす。其の兌を開き其の事を濟せば身を終るまで救はれず。小を見るを明と曰ひ柔を守るを強と曰ふ。其の光を用ひて其の明に復歸すれば身の殃ひを遺すこと無し。之を襲常と謂ふ。

第五十三 盜誇

介然私心を慎
 むなり
 施す私心を施
 す
 徑近道
 文采立派な着
 物

我をして介然として知有りて大道を行はしめば唯だ施すを是れ畏る。大道は甚だ夷かにして民徑を好む。朝甚だ除まりて田甚だ蕪れ倉甚だ虚し。文采を服し利劍を帶き飲食に飽き資材餘り有る是

盜誇人の物を盗みながら偉さを誇るなり

善く徳を

を盜誇と謂ふ。道に非ざる哉。

第五十四 善く建つるもの

善く建つる者は抜けず。善く抱く者は脱ちず。子孫祭祀を以て輟まず。之を身に修むれば其の徳乃ち眞なり。之を家に修むれば其の徳乃ち餘りあり。之を郷に修むれば其の徳乃ち長たり。之を國に修むれば其の徳乃ち豊なり。之を天下に修むれば其の徳乃ち普し。故に身を以て身を觀家を以て家を觀郷を以て郷を觀國を以て國を觀天下を以て天下を觀る。吾何を以て天下の然ることを知るや。此を以てあり。

第五十五 赤子に比す

含徳の厚きは赤子に比す。毒虫も螫さず。猛獸も據らず。攫鳥も搏たず。骨弱く筋柔かにして握ること固く未だ牝牡の合へること

峻作る起るなり陰莖の
生を益す名利
を求むる祥
心私氣元
にまかせてやる氣

を知らずして峻作るは精の至りなり。終日號けども噬嚙れざるは和の至りなり。和を知るを常と曰ひ常を知るを明と曰ひ生を益すを祥と曰ひ心氣を使ふを強と曰ふ。物壯んなれば則ち老ふ。之を不道と謂ふ。不道は早く已めよ。

第五十六 知る者は言はず

知る者は言はず。言ふ者は知らず。其の兌を塞ぎ其の門を閉ち其の銳を挫き其の紛を解き其の光を和げ其の塵に同ず。是を立同と謂ふ。得て親しむ可らず。得て疎んず可らず。得て利す可らず。得て害す可らず。得て貴ぶ可らず。得て賤む可らず。故に天下の貴と爲る。

第五十七 無爲にして化す

正を以て國を治め奇を以て兵を用ひ無事を以て天下を取る。吾何

忘諱 法律禁令

を以て其の然ることを知るや。此れを以てなり。夫れ天下忌諱多くして民彌よ貧し。人利器多くして國家滋す昏し。民技巧多くして奇物滋す起る。法令滋す彰はれて盜賊多く有り。故に聖人云く我無爲にして民自ら化す。我靜を好んで民自ら正し。我無事にして民自ら富む。我無欲にして民自ら樸なり。

第五十八 方にして割らず

悶々 無智のさま
察々 無智の反
對々 貧し
割らず 他人を
も方正ならしめ
んと無理に鉤を
掛けて割らず

其の政悶々たれば其の民醇々たり。其の政察々たれば其の民缺々たり。禍は福の倚る所福は禍の伏する所。孰れか其の極を知らん其れ正なるもの無きか。正復た奇と爲り善復た妖と爲る。民の迷へる其の日固とに已に久し。是を以て聖人は方にして割らず。廉にして劇らず。直にして肆びず。光にして輝かず。

第五十九 嗇に如かず

嗇 不足勝ちに
て盈滿を厭ふな
り
早く復る 少欲
なれば早く虚無
の道に復る
久視 健康

人を治め天に事ふるは嗇に如くは莫し。夫れ惟だ嗇なり。是を以て早く復る。早く復る之を重ねて徳を積むと謂ふ。重ねて徳を積めば則ち克せずといふこと無し。克せずといふこと無ければ則ち其の極を知ること莫し。其の極を知ること莫ければ以て國を有つ可し。國を有つの母は以て長久なる可し。是を根を深くし柢を固くすと謂ふ。長生久視の道なり。

第六十 小鮮を烹るが若し

大國 大は小鮮
の小に對するの
小鮮 小魚
若烹 丸煮にす
るから技巧を要
せず
鬼 狐狸妖怪
傷らず 罰を加
へず

大國を治むるは小鮮を烹るが若し。道を以て天下に蒞めば其の鬼神ならず。其の鬼神ならざるのみに非ず。其の神人を傷らず。其の神人を傷らざるのみに非ず。聖人も亦人を傷らず。夫れ兩つながら相傷らず。故に徳交も焉れに歸す。

第六十一 天下の牝

下流 謙遜

取る 心をとる

大國は下流せよ。天下の交るは天下の牝なればなり。牝は常に靜を以て牡に勝つ。靜を以て下ることを爲せばなり。故に大國以て小國に下れば則ち小國を取る。小國以て大國に下れば則ち大國を取る。故に或ひは下りて以て取り或は下りて而も取る。大國は人を兼ね蓄へんと欲するに過ぎず。小國は入りて人に事へんと欲するに過ぎず。夫れ兩つの者各其の欲する所を得。故に大なる者は宜しく下ることを爲す可し。

第六十一 善人の寶

不善人 愚人
人に加ふ 人の
上に立つ 人の
拱壁 大きな玉
駟馬 四頭立の
馬車 賢人を迎
へ聘するに駟馬

道は萬物の奧善人の寶不善人の保んぜんとする所なり。美言以て市る可く尊行以て人に加ふ可し。人の不善なる何の棄つることか之有らん。故に天子を立て三公を置く。拱壁の以て駟馬に先つこと有りと雖も坐ながら此の道に進むに如かず。古への此の道を貴

に先ちて拱壁を
進物とするにて
要するに賢人を
迎ふるなり

大は小 大は小
より起る

難んず 易し
して侮らす

ぶ所以の者は何ぞや。求めて以て得ば罪有るも以て免ると曰はずや。故に天下の貴なり。

第六十二 大小多少

無爲を爲し無事を事とし無味を味ふ。大は小多は少。怨みに報ゆるに徳を以てす。難きを圖るは其の易きに於てし大なるを爲すは其の細きに於てす。天下の難事は必ず易きに作り天下の大事は必ず其の細きに作る。是を以て聖人は終に大を爲さず。故に能く其の大を成す。夫れ輕るしく諾すれば必ず信寡く易きこと多ければ必ず難きこと多し。是を以て聖人すら猶ほ之を難んず。故に終に難きこと無し。

第六十四 九層の臺

其の安きは持し易し。其の未だ兆さるは謀り易し。其の脆きは

過ぐる所_{||}看過
して顧みぬ_{||}虚無
の道_{||}輔けて_{||}従つて

破り易し。其の微しきは散じ易し。之を未だ有らざるに爲し之を未だ亂れざるに治む。合抱の木も毫末より生り九層の臺も累土より起り千里の行も足下より始まる。爲す者は之を敗り執る者は之を失ふ。聖人は爲すこと無し。故に敗ること無し。執ること無し。故に失ふこと無し。民の事に従ふ。常に幾んど成るに於て之を敗る。終りを慎むこと始めの如くなれば則ち敗事無し。是を以て聖人は欲せざるを欲す。得難きの貨を貴ばず學ばざるを學ぶ。衆人の過ぐる所に復る。以て萬物の自然を輔けて敢て爲さず。

第六十五 民を愚にす

古への善く道を爲す者は以て民を明かにするに非ず。將に以て之を愚にせんとす。民の治め難きは其の智多きを以てなり。故に智を以て國を治むるは國の賊なり。智を以て國を治めざるは國の福

楷式_{||}法式_{||}萬民
物と反る_{||}虚無自然
と共に_{||}に反る

なり。此の兩者を知るも亦楷式なり。能く楷式を知る是を立德と謂ふ。立德は深く遠し。物と反る。乃ち大順に至る。

第六十六 百谷の王

江海の能く百谷の王爲る所以は其の善く之に下るを以ての故に能く百谷の王爲り。是を以て聖人は民に上たらんと欲して必ず言を以て之に下る。民に先たと欲して必ず身を以て之に後る。是を以て聖人は上に處りて民重しとせず。前に處りて民害とせず。是を以て天下推すことを樂しんで厭はず。其の争はざるを以ての故に天下能く之と争ふこと莫し。

第六十七 三寶

天下皆我が道大いに不肖に似たりと謂ふ。夫れ惟だ大なり。故に不肖に似たり。若し肖ならば久し其の細しきこと。我に三寶有り

言_{||}謙遜の言

我道_{||}老子の説
く虚無の道
不肖_{||}愚
久矣_{||}其細_{||}久し
き以前より小なり

成器 人
死せん 殺害さ
れる
天將に 更に天
も亦

持して之を寶とす。一に曰く慈二に曰く儉三に曰く敢て天下の先と爲らず。慈なるが故に能く勇なり。儉なるが故に能く廣し。敢て天下の先と爲らず。故に能く成器の長たり。今慈を捨て、且つ勇に儉を捨て、且つ廣く後を捨て、且つ先んぜば死せん。夫れ慈以て戦へば則ち勝ち以て守れば則ち固し。天將に之を救はんとす慈を以て衛ればなり。

第六十八 善く戦ふ者

與せず 相手と
ならぬ

善く士たる者は武からず。善く戦ふ者は怒らず。善く勝つ者は與せず。善く人を用ふる者は之が下と爲る。是を不爭の徳と謂ふ。是を人の力を用ふと謂ふ。是を天に配すと謂ふ。古の極なり。

第六十九 哀しむ者勝つ

主 戦を挑む側

兵を用ふるに言へること有り。吾敢て主と爲らずして客と爲る。

天下能く 然る
に天下能く

敢て寸を進まずして尺を退く。是を行きて行くこと無く攘げて臂無く扱きて敵無く執りて兵無しと謂ふ。禍は敵を軽んずるより大なるは無し。敵を軽んずれば幾んど吾が寶を喪ふ。故に兵を抗げて相加ふれば哀しむ者勝つ。

第七十 褐を被る

褐 賤しい服

吾が言甚だ知り易く甚だ行ひ易し。天下能く知ること莫く能く行ふこと莫し。言に宗有り。事に君有り。夫れ惟だ知ること無し。是を以て我を知らず。我を知る者希なれば則ち我れ貴し。是を以て聖人は褐を被りて玉を懐く。

第七十一 知りて知らず

病を病む 病を
病と知り 無心の
修養を積む

知りて知らざるは上なり。知らずして知るは病なり。夫れ唯病を病む。是を以て病まず。聖人の病まざるは其の病を病むを以て是

を以て病まず。

第七十一 大威至る

大威天罰居る所道生ずる所道見ず知らず貴ばず慢心起さの彼私智慢心此無智謙遜を以て聖人は自ら知りて自ら見ず。自ら愛して自ら貴ばず。故に彼を去すてて此こゝを取る。

第七十二 天網恢々

敢てするに勇めば則ち殺さる。敢てせざるに勇めば則ち活く。此の兩つの者或は利あり或は害あり。天の悪たむ所執たれか其の故を知らん。是を以て聖人も猶ほ之を難しとす。天の道は争はずして善く勝つ。言はずして善く應ず。召さずして自ら来る。坦然たんととして善く謀る。天網恢々疎にして失はず。

大威天罰居る所道生ずる所道見ず知らず貴ばず慢心起さの彼私智慢心此無智謙遜

之不争の徳
應ず應報を與へるなり來る謀る皆同意
恢々大

奇惡事

司殺者天

大匠に代りて研
る大工に代つ
て木を研るにて
不自然なり

其の上の榮華を食む

第七十四 司殺の者

民死を畏れず。奈何いかんぞ死を以て之を懼おそさん。若し民をして常に死を畏れしめ而して奇きを爲す者吾執まへて之を殺すことを得ば孰れか敢てせん。常に殺ころを司る者有ありて殺す。夫れ殺を司る者に代りて殺す。是を大匠に代りて研とふと謂ふ。夫れ大匠に代りて研る者其の手を傷やぶらざること有るは希まれなり。

第七十五 民の飢

民の飢うゆるは其の上かみ税を食はむの多きを以て是を以て飢ゆ。民の治め難きは其の上の爲すこと有るを以て是を以て治め難し。民の死を輕んずるは其の生を求むるの厚きを以て是を以て死を輕んず。夫れ唯生を以て爲すこと無き者は是れ生を貴ぶに賢まさる。

第七十六 強大と柔弱

兵強^レ戰を好む
猪武者^レ
共^レす^レ人の使用
に供^レされる

猶張^レ弓乎^レ弓は
反對^レの方にまげ
て張^レる高きを抑
へ下^レれる舉ぐる
は皆反對^レなり
人の道^レ俗人の
行^レふ所

人の生けるや柔弱なり。其の死するや堅強なり。萬物草木の生けるや柔脆なり。其の死するや枯槁す。故に堅強なる者は死の徒なり。柔弱なる者は生の徒なり。是を以て兵強ければ則ち勝たず。木強ければ則ち共す。強大は下に處り柔弱は上に處る。

第七十七 弓を張るが如し

天の道は其れ猶ほ弓を張るがごときか。高き者は之を抑へ下れる者は之を擧ぐ。餘り有る者は之を損し足らざる者は之を補ふ。天の道は餘り有るを損して足らざるを補ふ。人の道は則ち然らず。足らざるを損して以て餘り有るに奉ず。孰れか能く餘り有つて以て天下に奉ずる。唯有道者なり。是を以て聖人は爲して恃まず。功成りて處らず。其れ賢を見はすことを欲せず。

第七十八 正言は反するが若し

垢^レ孤・寡・不穀
の類^レ
社稷^レ國

和^レ大怨^レ怨^レ仲直り
餘^レ怨^レ怨^レ文^レ文^レ残る
左^レ契^レ證^レ文^レ文^レ持
司^レ契^レ證^レ文^レ文^レ持
つ^レて^レ明^レ細^レに^レ精
算^レする

小國寡民^レ我を
して國を治めし
めば^レの意^レにて小
寡^レは^レ謙^レ辭^レ
什伯^レの器^レ千百
の機械

天下の柔弱は水に過ぐるは莫し。而して堅城を攻むる者之に能く勝ること莫し。其れ以て之より易きは莫し。弱の強に勝ち柔の剛に勝つは天下知らざるに莫く能く行ふこと莫し。故に聖人云く國の垢を受くる是を社稷の主と謂ふ。國の不祥を受くる是を天下の王と謂ふ。正言は反するが若し。

第七十九 人に責めず

大怨を和ぐるも必ず餘怨有り。安んぞ以て善と爲す可けん。是を以て聖人は左契を執りて而も人に責めず。徳有るは契を司る。徳無きは徹を司る。天道親無く常に善人に與す。

第八十 結繩に復らしむ

小國寡民は什伯の器有りて而も用ひざらしめん。民をして死を重んじて遠く徙らず。舟輿有りと雖も之に乗る所無く甲兵有りと雖

294
5/3

結繩^{けつじょう}に繩を結んで文字に代へた古の無智
相往來^{あひまはり}に金を儲けんと駈け廻る

も之を陳ずる所無からしめん。民をして結繩^{けつじょう}に復りて之を用ひ其の食を甘しとし其の服を美とし居に安んじ其の俗を樂しみ隣國相望み雞狗の聲相聞えて民老死に至るまで相往來せざらしめん。

第八十一 聖人積まざる

信言は美ならず。美言は信ならず。善者は辯せず。辯者は善ならず。知る者は博^{ひろ}からず。博^{ひろ}きは知らず。聖人は積まざる。既に以て人の爲めにすれば己れ愈よ有り。既に以て人に與ふれば己れ愈よ多し。天の道は利して害せず。聖人の道は爲して争はず。

(終)

和文老子

編者
檢印

大正十五年二月二十日印刷納本
大正十五年二月二十五日發行

〔定價金五十錢〕

著作兼發行者 秋田市川口上裏町二十五番地 佐々木 寛

印刷者 秋田市大町二丁目二十三番地 中村政五郎

印刷所 秋田市茶町菊ノ丁一番地 明治活版所

發行所

秋田市大町二丁目十七番地

石川書店

電話(仙臺)一三九九番
振替(東京)三九九九番
口座(仙臺)六〇〇五番

終